# 昔話「かちかち山」の変貌

大阪芸術大学　文芸学科　教授　出 口 逸 平

１８世紀初頭に成立した昔話「かちかち山」は、現代まで多くの絵本や童話、さらには小説・舞踊・戯曲のかたちで書き継がれてきた。

今回はいたずらをしては人を困らせ、ウサギに懲らしめられる敵役のタヌキに的をしぼって、その特徴を探ってみたい。

## １　狡猾な狸

じつは「かちかち山」は、①「狸の婆汁」（狸が婆さんをだまして殺す）と②「兎と狸（熊）」（兎が愚かな狸をいじめて殺す）という別々の動物説話が、「兎の敵討」（爺に代わって、兎が狸に復讐する）という勧善懲悪の「論理」によって１つに結び付けられ成立したと考えられている（柳田国男の評論「かちかち山」１９３５）。

たとえば①「狸の婆汁」に見られる狸の残酷さや狡猾さは、昔話「かちかち山」最初期の作品である赤本「兎大手柄」のなかで、「婆様、わしは何の実になりますわいの。大ぶんいたい、縄を解いて下さい。麦を搗いて進ぜう」と口説いて、「婆、不憫に思い、縄を解き、麦を搗かせけるに、そのまま婆を打ち殺し、汁に煮て」、さらにそれを爺に食わせて高笑いしながら逃げ去るという場面に、色濃く残っている。

しかも１９世紀に入ると鈍亭魯文の草双紙「かちかち山」（１８５９）では圧殺、豆本「かちかちやま」（１８８７）では撲殺と、狸の婆殺しの残虐さはさらにエスカレートする。

それゆえ大正期に入るや巌谷小波の評論「残酷なかちかち山」（１９１５）のような批判を受けて、今度は婆も狸も死なない「教育的」改変が施され、狸は腕白だが、最後は兎の忠告を聞き入れ改心するかたちに改められる。戦後はこの近代童話としての「かちかち山」がひろく行き渡ることになる。

## ２　愚鈍な狸

他方「かちかち山」の狸が、②「兎と狸」にある愚さを引き継いでいることは、柴を背負って火を点けられたり、泥船に乗っておぼれるといった有名な場面に明らかだろう。

じつは古代では「山に住むイヌ科動物の総称」、中世では恐ろしい「妖怪・凶怪」とみられていた狸のイメージは、江戸中期になると人間生活に身近な「戯怪・愚怪」に変化してくる（中村禎里『狸とその世界』１９９０）。

「かちかち山」の系譜においても、たとえば黄表紙「親敵討腹鞁」（朋誠堂喜三次　１７７７）では、なんと狸の息子が登場して兎を付け狙い、「親の敵思ひ知れと胴切にしければ」「うさぎを二つに切りて出来たる鳥なれば、黒きを鵜、白きを鷺と名づけし」と、敵討を茶化してパロディにしてしまう。また戦後ミステリーでは「誰が婆（狸）を殺したか」をめぐって、佐野洋や北村薫があれこれ知恵を絞っている。

なかでも太宰治の小説「カチカチ山」（１９４５）は、「兎＝潔癖な少女」「狸＝恋する中年男」という見立ての鮮やかさで群を抜いている。狸は「兎の少女に恋している醜男」で、「愚鈍大食の野暮天」。恋に惑うゆえに兎の企みにまったく気がつかず、ついに狸は「惚れたが悪いか」と叫んで溺死する。作者は「女性にはすべて、この無慈悲な兎が一匹住んでいるし、男性には、あの善良な狸がいつも溺れかかってあがいている」と評する。動物の復讐譚を、そのまま男女の恋愛譚に置き換える手際の冴えはじつに見事というほかはない。

## ３　「悪の道化」としての狸

このように「かちかち山」の狸は、「狡猾（残酷）にして、愚鈍」という「矛盾」したキャラクターを有している。

民俗学者柳田国男は先に触れた評論「かちかち山」で、「このような一貫せざる性格というものは有り得べきでないが、昔話だけには妙に時々是が見られる」と述べる。たしかに近代リアリズムからすれば狸は「一貫せざる性格」にみえるが、物語世界にはこうした「矛盾」は決して珍しくない。むしろ勧善懲悪の枠に収まらない狸の「残酷さと愛嬌（あるいは恐怖と笑い）」にこそ、昔話「かちかち山」が現在も読み継がれ、書き換えられていく魅力の源泉があるのではないか。私は「かちかち山」の狸には、人類学・神話学における「トリックスター」（いたずら者）の概念と一脈通ずるものがあると考えている。

昔話の領域でいえば、笑話（とくに狡猾譚）に登場するあまのじゃくや彦市は、ずるがしこくて大いに世間を混乱させるが、どこか間が抜けていて、悪巧みはほとんど実を結ばない。悪党と道化を兼ね合わせた「悪の道化」というべき独特の存在である。

こうした「悪の道化」は、また昔話の世界だけにとどまらない。たとえば中世の説話集「宇治拾遺物語」「雑談集」では「狂惑の人」と呼ばれる破戒僧、狂言なら「悪太郎」「月見座頭」に登場するすっぱ（詐欺師）や盲目僧、歌舞伎では「敵討天下茶屋聚」の安達元右衛門や「隅田川続俤」の法界坊、さらにいうなら現代演劇の井上ひさし「藪原検校」や野田秀樹「野田版　研辰の討たれ」の主人公もその仲間に入れることができる。

目を外に転ずれば、中国明代の短編小説「三言二拍」や西洋中世以来のピカレスク小説に現れる悪漢たち、またシェイクスピア劇の道化も浮かんでくるが、このような「悪の道化」の広がりについては、あらためて論じることにしたい。